

石川県立美術館だより

平成18年1月1日発行 第267号

黒の迷宮

木下 晋・小林敬生・日和崎尊夫

1月4日(水)~2月5日(日)会期中無休
午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)



憧憬 木下 晋

凝視の刻



KALPA X 日和崎尊夫



蘇生の刻 S62-8 小林敬生 町田市立国際版画美術館蔵

明けましておめでとうございます

本年もよろしくお願いいたします

あけましておめでとうございます。

最近金沢学ということが盛んにいわれ、検定試験までが実施され、多くの受験生でにぎわったことは耳新しいことですが、それ程までに金沢を中心とした石川の地に、多くの人々が関心を持つようになってきました。当館は設立当初より「郷土色豊かな美術館づくり」をめざし、いくなれば金沢学を先取りするような形で活動をしてきました。そして多くの篤志家、作家などから貴重な作品の寄贈を受け、また購入することによって、郷土色豊かなコレクションが形成されてきました。美術館や博

物館の仕事は、なんといっても個性ある質の高いコレクションを持ち後世に伝えていくということが、何時の時代にあっても変わらない本質だと思っています。また、企画展を開催し、地域の人々に優れた美術品の鑑賞の機会を提供することも役割の一つであり、その企画展もできればコレクションと何らかの関わりのある展覧会を開催することが、地域の美術館、博物館に課せられた責務だとも考えています。新しい年を迎え、本年も多くのの方々の変わらないご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げます。
(嶋崎 丞 当館館長)

今月の企画展示室(第7~9展示室)

黒の迷宮 - 凝視の刻 -
木下 晋・小林敬生・日和崎尊夫

1月4日(水)~2月5日(日)会期中無休

主催 / 石川県立美術館
共催 / 北國新聞社
後援 / NHK金沢放送局、北陸放送、石川テレビ放送
テレビ金沢、北陸朝日放送



凝視する男 木下 晋
信濃デッサン館蔵



祈り 木下 晋
富山県立近代美術館蔵

黒はひと色で世界を表現しうる唯一の色です。黒から紙の白への無限のグラデーションは、モノクロ写真のようにリアルな世界を描くこともできずし、水墨画のように思惟に富んだ精神世界を描くこともできません。色はそれぞれ、ある特定の感情を見る者に喚起させます。しかし、色味をのぞいて無彩色の明暗の階調に世界を置き換えればどうでしょう。そこには客観性が生じ、幅広い表現が可能となるのです。この点黒は他の色とは性質を異にする、特殊な色といえます。

本展は、黒を用いて、人が視ることの限りを尽くし、そして描き込んだ、凝視の世界をご覧ください。9Hから9Bまでの20種の鉛筆を駆使して人間を描きつづける木下 晋、木口木版で、微細なそして暗示に満ちた不思議な世界を展開する日和崎尊夫と小林敬生、この三人の黒線が織りなす細密描写の魔宮は、写実と幻視の両洋にそびえ立ち、視る者に驚嘆と畏怖の念を起こさせます。視覚情報が満ちあふれ、ややもすれば視ることが情性に流れがちな現代に、彼らの凝視の世界は、視ることは考えることであり、意志を伴うものであることを、強烈に語りかけるのです。本展を機に、視ることの意味を再確認いただければ幸いです。

主な展示作品

木下 晋作

- 祈り 昭和62年 富山県立近代美術館蔵
- 無一 平成4年 目黒区美術館蔵
- 凝視する男 平成6年 信濃デッサン館蔵
- 視線 平成8年 富山県立近代美術館蔵
- 静かな慟哭 平成13年 富山県立近代美術館蔵
- 憧憬 平成17年 富山県立近代美術館蔵

小林敬生作

- 遺された部屋 10 昭和54年 東京国立近代美術館蔵
- 蘇生の刻 - 静止した刻 - 昭和59年 東京国立近代美術館蔵
- 蘇生の刻 S 62-8 昭和62年 町田市立国際版画美術館蔵
- 蘇生の刻 群舞 94-10 A 平成6年 黒部市美術館蔵
- 蘇生の刻 群舞 99-3 A 平成11年 黒部市美術館蔵
- 白い朝又は早暁 群舞・05・D 平成17年 黒部市美術館蔵

日和崎尊夫作

- 食星帯のかたち 昭和39年 町田市立国際版画美術館蔵
- KALPA X 昭和44年 町田市立国際版画美術館蔵
- 海淵の薔薇 昭和47年 町田市立国際版画美術館蔵
- 詩画集「緑の導火線」 昭和57年 町田市立国際版画美術館蔵
- 永劫回帰 昭和63年 東京国立近代美術館蔵

木下晋氏・窪島誠一郎氏(信濃デッサン館館主)の対談(入場無料)
日時 平成18年1月8日(日) 午後1時30分
会場 石川県立美術館ホール
演題 「生命の炎を、みる」
小林敬生氏講演会(入場無料)
日時 平成18年1月22日(日) 午後1時30分
会場 石川県立美術館ホール
演題 「私と木口木版、そしてヒワさんのこと」

学芸員によるギャラリートーク(観覧料必要)
日時 1月15日、29日、2月5日
いずれも日曜午前11時
会場 企画展示室

観覧料

個人	団体(20名以上)
一般 800円	一般 600円
大学生 600円	大学生 400円
高校生以下 200円	高校生以下 100円

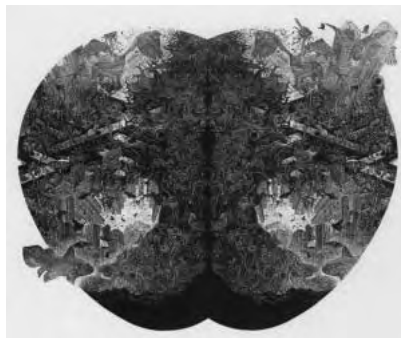
当館友の会員は受付での会員証提示により、団体料金になります。



海淵の薔薇 日和崎尊夫



永劫回帰 日和崎尊夫
東京国立近代美術館蔵



蘇生の刻 群舞 99 3 A 小林敬生



遺された部屋 10 小林敬生
東京国立近代美術館蔵

今月のコレクション展示室

(前田育徳会展示室)

特集

茶道美術名品展

1月4日(水)~2月5日(日)前期

2月8日(水)~3月1日(水)後期

前田家では藩祖利家以来、代々の藩主は茶の湯に深く心を寄せています。利家の茶の師匠は千利休であり、利休没後は信長の弟である織田有楽が利家晩年の茶の指導者であったといわれています。今日、利家に関する茶道具の伝来は非常に少なく、その中で代表的なものといえば、今回展示する重文の「大名物 唐物茄子茶入 銘富士」です。この作品の公開は「利家とまつ 加賀百万石物語展」以来ですから四年ぶりとなります。「国司」「北野」とともに天下の三茄子といわれて古くから名高い茶入です。殊にこの茶入は、姿、釉景ともに格調が高く、堂々たる風格を持つており、茄子茶入の中でも傑出しているところから「富士」の名がつけられたと言われます。付属物として蓋一枚、仕覆三枚(解袋を含む)、堆朱彫草花文丸盆、千利休作の茶杓が添えられています。

伝来は足利義輝所持の後、曲直瀬道三、祐乗坊、織田信長に伝わり、信長没後再び道三の手に帰り、天正十五年の北野大茶湯に出陣され、その後道三の孫より豊臣秀吉に献じられ、慶長二年(一五九七)、秀吉から利家が拝領し、以後代々前田家に伝えられました。

戦国武将にとつての茶の湯とは、単なる娯楽や遊戯ではありません。常に死と隣り合わせの社会に生き、強靱な精神力を要求された彼らにとつて、茶の湯は人間としての己を取り戻すための心の慰めとして、限りなく魅了されたのも当然の成り行きであったでしょう。また、名物茶器への憧れは、自己の権力誇示という面から、茶の湯執心の大きな要素でもありました。

このように名物茶器を所持することは、天下人としての権威の象徴です。この茶入の拝領は、利家が天下人として認められただけでなく、秀吉が利家に後継者として後を託したことを示す証左とも言えましょう。

茶入にこめた代々の所持者に想いを馳せながら、ご鑑賞下さい。



当館が所蔵する茶道具は、昭和五十八年、当館の開館の際に寄贈を受けた、いわゆる「山川コレクション」がその中心となっております。ほかにも多くの方からのご寄附を受けた作品が多数を占めていますが、今回の展示では、こうした所蔵品に加え、一部寄託品を交えて「茶道美術」の名品七十三点をご覧いただきます。会期半ばで一部作品の展示替を行います。今号では前期の展示品の中から、いくつかを紹介いたします。

新春にふさわしい道具として、重文で野々村仁清作の**色絵梅花図平水指**があります。側面いっぱい梅の老樹が描かれており、ところどころに金彩や銀彩の梅の花を添えて変化をつけています。華やかな中にも気品のあふれる作品で、日本趣味豊かな、しかも京風の洗練された意匠構成の華麗で優美なやきものです。

大樋焼では初代、五代の長左衛門作の名品をご覧いただけます。県文の**飴釉烏香炉**は初代の作で、ガラスの鳴いた瞬間のポーズを巧みに捉えています。素朴さの中にも現代に通じる新しい造形感覚が見て取れます。ほかに**飴釉壺五角香合**、**飴釉赤茶碗**、**黒釉富士絵茶碗**などを展示します。

前田家に伝来した道具では、牧谿の筆と伝えられる**観音図**をはじめ、**黄天目**、**青貝柳水鳥図角盆**や前田利長が所持した**瀟瀟盞**を展示します。

香合では、久方ぶりに**和蘭陀白雁香合**をご覧いただきます。十七世紀オランダのデルフト窯で製陶されたもので、石川県指定文化財となっております。いかにも優美で愛らしい趣を呈しており、古来より名高い名品です。ほかに**志野桔梗香合**、**古染付張甲牛香合**、**交趾金花鳥香合**などが展示されます。

茶碗では、**祥瑞山水文沢瀉形茶碗**、**小井戸茶碗**、**銘玉兔や伊羅保片身替茶碗**のほか、**志野茶碗**、**銘鳳池**などが目をひきます。

今月のコレクション展示室

(第2展示室)

特集

茶道美術名品展

1月4日(水)~2月5日(日)前期

2月8日(水)~3月1日(水)後期



色絵梅花図平水指 野々村仁清

今月のコレクション展示室
(第5展示室)

特集
近代工芸と茶道具

1月4日(水)~2月5日(日)



流水桜文蒔絵神代櫻棗 松田権六

石川県は東京・京都と並び、茶会を行う際に、必要な茶道具などがすべて、地元でまかなえるというほど、お茶が盛んな地域として知られており、当館には古美術から近現代作品まで、様々な茶道具が所蔵されています。

一月から二月にかけて、前田育徳会展示室・第2展示室と併せて、近現代工芸作家の作品を展示する第5展示室においても、こうした作家たちによる茶道具、あるいは茶道具と見立てた作品を、前期と後期に分けて一堂に展示します。

通常、第5展示室では、日本伝統工芸展等と同様に、技術的な面が分かりやすく見ることが出来るよう、素材別に分けて工芸作品を展示していますが、今回は茶道具というテーマに合わせて、形態別の展示となります。

ケースごとに、花入・香炉・香合・水指・釜・茶器・茶碗・菓子器をそれぞれ展示し、また金沢の茶陶を語る上で欠かすことの出来ない大樋焼や、人間国宝・石黒宗麿の、バラエティーに富んだ茶碗などをまとめて並べ、さらに季節に合わせた取り合わせの展示も加えました。

この展観は、今までは気づきにくかった、工芸作品の新たな、というよりもむしろ、本来の魅力を引き出したというものです。そしてご覧いただいた方々に、美術館に収蔵され、鑑賞されるのみとなっている美術工芸品の「用の美」を、再確認していただけたことと思います。

今回は前田育徳会展示室・第2展示室に展示された、江戸時代以前の茶道具と合わせて観ることで、茶道具の歴史の変遷を辿り、近現代の工芸の発展が別の側面から見る事が出来ます。またご覧頂いた方々が、それぞれの好みの取り合わせを考えて、展示室の作品を、より身近に感じていただければ幸いです。

鑑賞ファイル No.5

木口木版画について



制作中の日和崎尊夫氏

木版画の版木には木のタテ割方向に切り出した「板目版」と横割り方向に切り出した年輪が見える板の「木口板」の2種類あります。

木口木版は、18世紀ヨーロッパの印刷技術から生まれた技法でした。年輪のよくしまった堅い木口板は、精巧な彫刻が可能で、活字とともに並べて大量の機械印刷にも耐え得る優れた版材でした。主に黄楊や椿などが用いられ、それらの堅い木をけずるには、刃の厚みがあり、鋭く、堅い刃でなければなりません。そこで、銅版用のビュランやノミで彫って版を作ります。プレス機によって刷ることもできますが、細かい調子を出すには、スプーンの外側の丸くなった部分を使って刷り上げます。

本の挿絵などの印刷技術だった木口木版は、写真製版技術の発達とともに急速に衰退していきました。現在では、日和崎尊夫をはじめ、日和崎の作品に影響された小林敬生ら幾人かの版画家によって独創的な芸術表現の手段として制作されるようになったのです。



版木(詩画集「卵」より)

今月のコレクション展示室 主な展示作品

1月4日(水)~2月5日(日)

● = 国宝 = 重要文化財
= 石川県指定文化財



柏葉文釜 初代寒雉写
十二代宮崎寒雉



酔っぱらい 坂 坦道

前田育徳会展示室

特集 茶道美術名品展(前期)

- 大名物 唐物茄子茶入 銘富士
- 玳皮蓋天目(梅花天目)
- 後水尾天皇宸翰
- 前田利常書状
- 竜三爪唐草文様緞子(珠光緞子)

第1展示室

● 色絵雉香炉

色絵雌雉香炉

- 野々村仁清
- 野々村仁清

第2展示室

- 青手老松図平鉢 古九谷
- 色絵鶴かるた文平鉢 古九谷
- 色絵鳳凰図平鉢 古九谷

特集 茶道美術名品展(前期)

色絵梅花図平水指

- 野々村仁清

鉛釉烏香炉

- 初代大樋長左衛門

和蘭陀白雁香合 デルフト窯

織部沓茶碗

- 真宗大谷派金沢別院蔵

第3・4展示室(油彩画・彫塑)

油彩画

二人

- 鴨居 玲

福笑い・は

- 庄田常章

馬に凭る(B)

- 高光一也

セーヌ川遠望

- 田辺栄次郎

黒いタイツ

- 南 政善

熱叢夢

- 宮本三郎

彫塑

酔っぱらい

- 坂 坦道

黒い木

- 清水良治

歌姫

- 得能節朗

第5展示室(工芸)

特集 近代工芸と茶道具

陶磁

海老耳端反水指

- 九代大樋長左衛門

梅華皮筒茶碗

- 石黒宗磨

漆工

漆の花生

- 松田権六

鷺蒔絵平棗

- 寺井直次

金工

柏葉文釜 初代寒雉写

- 十二代宮崎寒雉

木竹工

法隆寺古材茶杓

- 氷見晃堂

第6展示室(日本画・書)

日本画

三味線

- 北野恒富

雪中難旅之図

- 紺谷光俊

桃鶏図

- 鈴木華邨

四季花鳥図

- 広田百豊

紅白梅

- 前田青邨

書

万寿無疆

- 表 立雲

暁雲

- 久田鶴南

世農中葉

- 豊道春海

五言二句

- 横西霞亭

観覧料

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		

- 吉田三郎



暁雲 久田鶴南



雪中難旅之図 紺谷光俊



二人 鴨居 玲

展覧会回顧

サントリー美術館名品展 日本美術の精華



本展は東京にあるサントリー美術館の所蔵品のうち、国宝1件、重要文化財11件を含む同館の名品139件を展覧するものでした。サントリー美術館の所蔵品は、昭和36年の開館以来、生活の中的美をテーマに掲げ、日本古来の美術・工芸品を中心とする3,000件にも及ぶもので、国内有数のコレクションとなっています。

今回は、2007年の春に都内の六本木にリニューアルオープンを控えた同館の特別な協力を得て実現したものでした。展示作品は、平安時代から江戸時代に及ぶもので、ジャンルとしては絵画から陶磁、漆工、染織、ガラス、金工に及ぶ広範囲な作品を、6つのテーマに分けて展示しました。絵画では迫力ある屏風に、物語図や往時の人々の生活様子が描きこまれた絵巻など、陶器では茶碗・鉢・花生けなどの優れた茶道具が、磁器では色絵の鉢・瓶・皿などの色鮮やかな作品が印象に残っています。

漆工品では、精緻な蒔絵の硯箱・文台と豪華絢爛な螺鈿の手箱類が、また精巧で華麗な櫛・笄や各種香合などの可愛い身回り品にも目が奪われました。さらに南蛮漆器や多彩な酒器などの実用的美も印象深く、小袖を中心とした染織品や茶釜など多彩な分野に及ぶ多くの名品の姿が思い浮かびます。

展示作品には、当館で所蔵する古美術作品の茶器や琳派の作品など、同じような傾向の作品が見られた反面、南蛮漆器や南蛮屏風、また洛中洛外図・祭礼図・風俗図など、当館には無い傾向の名品にもふれることができ、古美術ファンを中心とするご観覧者の皆様はもとより、展示に係わった我々学芸員もさまざまに比較対照ができ、大いに勉強となった展示でした。

また会期中にはサントリー美術館主席学芸員である石田佳也氏の講演会をいただき、展示作品の理解を深めることができました。

ちなみに、入館者数は当初の予定者数を僅かながらも上回る方々にご入館いただき、また鑑賞者からも多くの称賛の声をいただき感謝しております。

これからの展示活動においては、独自の企画展示とともに、国内外の名品のコレクションの紹介にも大いに勤めていきたいと思います。（北澤 寛 学芸主査）

図書閲覧室NOW

昨年は、『古今和歌集』成立1100年、『新古今和歌集』成立800年の節目の年にあたります。そのため、それにちなんだ展覧会がいくつか開催されました。

当館でも、8月から9月にかけて、コレクション展示室の古美術部門において、前田育徳会や県内に所蔵されている国宝・重文の名品を中心に特集展示し、好評を博しました。

ここでは、県外で開催された関連の展覧会図録を、ご紹介したいと思います。

「やまとうた 美のこころ」

宮内庁三の丸尚蔵館（10月8日～12月11日）

本展では、同館の所蔵品や御物のなかから、歌集や手鑑、絵画や工芸品など、50点の名品が展覧されました。

「やまとうた一千年

古今集から新古今集の名筆をたどる」

五島美術館（10月29日～11月27日）

本展では、『古今和歌集』から『新古今和歌集』にいたる八代集すべてに焦点をあて、各勅撰和歌集の主な写本・古筆類の優品224点を、一堂に展示しました。

「うたのちから 和歌の時代」

国立歴史民俗博物館（10月18日～11月27日）

本展は、国文学研究資料館と共同して企画したもので、和歌とそれが果たした歴史的・文化的な役割を、約300点に及ぶ資料の内に見ていこうとするものでした。

「和歌浦 その景とうつりかわり」

和歌山市立博物館（10月21日～11月23日）

和歌浦は古来、名勝地として知られ、『古今和歌集』のなかでも賞賛されました。本展では、歌に詠まれ、美術工芸品に表現された和歌浦の景観の変遷を、約110点の資料で跡づけました。

館外の貸し出し、コピーサービスは行っておりません。
開室時間は午前9時30分～午後4時30分。

各地の展覧会 1月

開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

新春を祝う 1/4～2/5

石川県立歴史博物館（金沢市・076 262 3236）

トライ・アート2006 ハートビートプロジェクト

2/6まで

富山県立近代美術館（富山市・076 208 9096）

京都社寺伝来の名刀 1/2～2/12

京都国立博物館（京都市・075 541 1151）

書の至宝 - 日本と中国 1/11～2/19

東京国立博物館（台東区・03 3822 1111）

生誕100年記念 吉原治良展 2/26まで

愛知県美術館（名古屋市・052 971 5511）

東山魁夷 小品展 2/26まで

小松市立本陣記念美術館（小松市・0761 22 3384）

生誕120年記念 富本憲吉展 1/7～3/5

奈良県立美術館（奈良市・0742 23 1700）

日本近代洋画への道 - 山岡コレクションを中心に -

1/13～3/12

岐阜県美術館（岐阜市・058 271 1313）

ミュージアム レポート

キッズ 鑑賞講座

10月1日(土)「宮本三郎の素描を鑑賞しよう」



今年で生誕100年をむかえる宮本三郎の素描を子供たちと一緒に鑑賞しました。宮本が戦地に派遣された時に描いた「南方従軍素描集」をじっくり見ました。記録画ですが、現地に生活する人々を生き生きと描いている素描で、子供たちも興味を持って見てくれました。一日に100枚くらい素描を描いていたことや、それらをもとに油絵の本制作をしていたことを説明すると、子供たちはびっくりし、『すごいねー。』と感心していました。

その他、素描に使う画材(パステル、コンテ、木炭、鉛筆など)を実際に使ってみて、それぞれの描き味を比べてみたりしました。始めて手にする画材に目を輝かせてお絵かきをしました。子供たちには画材体験が一番楽しかったようです。次回の鑑賞講座は2月4日(土)「黒の迷宮を鑑賞しよう」です。この機会に私たちとたくさんの美術に親しみましょう。

ギャラリートーク

10月8日(土)「宮本三郎の素描」



宮本三郎は、郷土が生んだ偉大な洋画家であり、また、素描画家ともいえます。宮本は素描が非常に好きで、紙と鉛筆があればすぐに描いたといえます。素描の世界から本制作の油絵画に結びついていくことなどを話しながら、個々の作品について解説しました。

特に第二次世界大戦中に南方戦線にて戦争記録画家として派遣された時に描いた、生命感が溢れる「南方従軍素描集」については、宮本が戦時下であっても人々の暮らしに目を向けた優しさが伝わってくる作品を、小松市で開催されている宮本三郎展の作品を話題にしながら、彼の卓越した素描の世界を紹介しました。終了後、ある一部の参加者

から、画面上に見える茶色の染みは、裏面のセロテープが原因でないのかとの指摘もあり作品の保存について参加者とも保存の大切さを再認識した1時間でした。

11月12日(土)「朝鮮のやきもの」



最初に、本展の開催主旨(総務省が本年進めている『日韓友情年2005』に協賛して開催するもの。陶芸が日本人に最も好まれている朝鮮の美術工芸品。朝鮮半島全体のやきものということで、朝鮮のやきもの展として紹介。)と概要(高麗青磁と李朝の陶磁)をお話しし、展示順に、作品の解説をしながら、その背景にある歴史、文化等の話しをしました。

高麗青磁の青磁象嵌菊花文托蓋では、天目と天目台の関係など参加者の中からいろいろな話が出ました。

李朝時代には、白磁が求められ、白土装飾を施す粉青は白磁の代用品として作られ、白磁が普及するようになると次第に衰退し、白磁に吸収されていったこと。一方白磁の方は、染付、辰砂、鉄砂など多彩な展開を見せことを展示作品で理解いただきました。

多数の質問が出ましたし、また、皆さんの思いが語られるなど、朝鮮のやきものが皆さんに大変好まれていること、関心を持たれていることを再認識いたしました。

11月26日(土)「至芸の世界 人間国宝・芸術院会員」



石川県は、江戸時代加賀藩主前田家の美術工芸への積極的な奨励によってほとんどの分野の工芸技術が育成され、その流れは今日まで絶えることなく続いています。そして

その伝統の中から多くの工芸家が輩出され、また著名な工芸家も訪れています。今回はそういった中から、芸術院会員、重要無形文化財保持者(人間国宝)となられた作家の作品を特集したもので、コレクション展示としては大変充実したものであったため、参加者は友の会会員の方も多く、日頃の疑問点についての質問もでて、楽しく鑑賞できたのではないのでしょうか。

1月の行事案内 《入場無料(ギャラリートークを除く)・いずれも午後1時30分から行います》

月日	行事	内容	会場
1/8(日)	講演会(対談)	木下晋氏・窪島誠一郎氏(信濃デッサン館館主)の対談 演題:「生命の炎を、みる」	ホール
1/14(土)	ギャラリートーク	茶道美術名品展 (高嶋清栄 学芸専門員) 展示室内で行われるため、コレクション展示の入場券が必要です。	コレクション展示室
1/15(日)	ビデオ鑑賞会	正倉院宝物11 大仏開眼への遙かな道(30分) 正倉院宝物12 花開く仏教文化(30分)	ホール
1/21(土)	美術講座	黒の迷宮 木下晋・小林敬生・日和崎尊夫の世界(二木伸一郎 学芸専門員)	講義室
1/22(日)	講演会	演題:「私と木口木版、そしてヒワさんのこと」 講師:小林敬生氏	ホール
1/28(土)	美術講座	世界遺産を訪ねて1 法隆寺 (谷口出 普及課長)	講義室
1/29(日)	ビデオ鑑賞会	正倉院宝物12 花開く仏教文化(30分) 正倉院宝物13 鑑真大海を渡る(30分)	ホール

1月の全館休館日は1日(日)~3日(火)です。



すかしぼりこびょうぶ
透彫小屏風

ひみこうどう
氷見晃堂

明治39年～昭和50年(1906～1975)

昭和28年(1953) 第9回日展北斗賞

縦50.4 横187.9(cm)

この作品は、^{じんだいつき}神代槻と^{たが}栃という材質の違う堅木の板を段替わりに組み合わせ、それぞれの面にデザイン化した松桐文を透彫りの技術を駆使して現代風に表現した二枚折の小屏風です。文様の縁取りには桐、神代杉、^{つげ}黄楊、^{もくそうがん}黒柿などの材を木象嵌の技法であらわし、全体の縁取りは^{たがやさん}鉄刀木を使うなどそれぞれ色彩のちがう7つの材質を使用した意匠構成は華やかで効果的であり、^{さしもの}指物、透彫り、木象嵌といった木工技術への挑戦がみなぎる作品で、第9回日展に出品し北斗賞を受賞しています。

作者は、本名を「與三治」といし、明治39年(1906)金沢市に生まれました。先祖は名前の称すとおり富山県の氷見出身で、晃堂が生まれたころは、手広く雑貨商を営み、かなりの資産家でした。しかし、大正、昭和のはじめごろは新しい事業に手を出して次々と失

敗したため、商売よりも自立して他人に世話にならない手に職を持った方がいいという両親の考え方で、職人の道へ進むこととなります。大正10年(1921)、当時金沢きっての指物職人といわれた北島伊三郎に弟子入りし、そこで木工技術の基礎基本を習得、さらに唐木にすぐれた木工作家初代池田作美に師事し二十歳頃から展覧会に出品しはじめ、江戸時代に盛んであり、明治以降途絶えていた砂磨き法を研究し復興します。

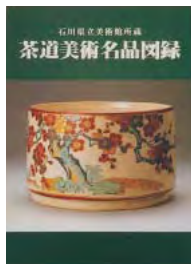
作風は、この作品のように、当初は多数の木材を用いた木象嵌に透彫りや指物の技術をみせ、精緻で華麗な意匠でしたが、やがて次第に加飾を抑え、木材の持つ自然な美しさを生かした木工技術が中心となり、昭和45年(1970)に重要無形文化財「木工芸」の保持者に認定されました。

第5展示室で展示中

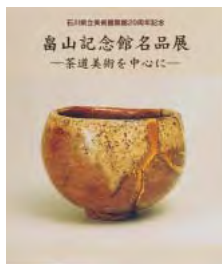
— ミュージアムショップ通信 —

新年明けましておめでとうございます！今年もよろしくお願いたします。企画展「黒の迷宮 凝視の刻 木下晋・小林敬生・日和崎尊夫」がスタートしました。3人の作家が独自の世界を展開、黒線が織りなす細密の魔宮を是非、ご堪能ください。また、コレクション展示室では「茶道美術名品展」も開催しています。お茶を嗜んでいる方もそうでない方も「黒の迷宮」をご覧になった後は、2階にも足を運んでいただきたいと思います。(企画展のチケットでコレクション展もご覧いただけます。)

今月は**茶道美術名品図録**と**畠山記念館名品展**を紹介します。定価は前者が2,500円、後者が2,200円です。ショップにお寄りの際は手にとってご覧下さい。お待ちしております。



茶道美術名品図録 (定価2,500円)



畠山記念館名品展 (定価2,200円)

次回の展覧会

- 特集 茶道美術名品展(後期)
(前田育徳会・第2展示室)
 - 特集 近代工芸と茶道具 (第5展示室)
 - 特集 彫刻 石川の昭和30年代(第5展示室)
- 2月8日(水)～3月1日(水)

休館日：1月1日(日)～3日(火)

石川県立美術館だより 第267号
2006年1月1日発行
〒920 0963 金沢市出羽町2番1号
TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>